

流

星

れ

の

消

え

た

夜



流 星
の
消 えた 夜



流れ星の消えた夜

飛鷹 隼
Jun Hiyoh

T★NOVELS
Fantasia

Index

<i>part.0</i>04
<i>part.1</i>09
<i>part.2</i>19
<i>part.3</i>29
<i>part.4</i>41
<i>part.5</i>51
<i>part.6</i>61
<i>part.7</i>75
<i>part.8</i>87
<i>part.9</i>99
<i>part.10</i>111



part.0

銀河系西部外縁星域——

直径一〇万光年を誇る巨大なレンズ状銀河にあつても、その末端に近いこの星域では星々の光も満天を埋め尽くすと言うには、あまりにも少なく、頼りない。

そんな、銀河の辺境の闇の一角が不意に鮮やかな光芒に満たされ、それがやがて緩やかに収まった時、その中心付近に一塊の銀色の光の群れが予告なく現れていた。

それは周囲に散在する星々と同じく、か弱き銀色の光を放っていたが、同時にそれは明らかに自然に存在する星々とは明らかに異なる存在であつた。何故なら、それはほぼ光速に近い速度から緩やかに減速しつつ、一定の距離と隊形を保ちながら移動を行なっていたからである。

汎惑星間統合防衛機構軍と言ふ名の組織に属する、第103任務部隊——

それが、この闖入者の正体であつた。

汎惑星間統合防衛機構軍——頭文字を取りTILDA——チルダと呼び現わされるそれは銀河系宇宙に存在する数多の星間種族の中で最大の勢力を誇る地球系人類域の中でも、尤も入植時期の遅かつた銀河系西部辺境海域の新興小国家群が相互に協力して作り上げた組織だつた。

同じ人類域と言つても、銀河系宇宙の五分の一近い巨大な版図を有する太陽系連邦に比べれば、あまりにも細やかな単一星系国家、それも独立から四半世紀を経た国家が絶無に近い西部辺境では国家単位での自衛力のみで祖国を維持する事は実質不可能に近かつた。

とはいえ、彼等もまた西方独立国家連合体ウエストインディアン・コモンウェルスという惑星国家の集合体という形で辛うじてではあつても汎銀河連合G.N.——今や銀河系最大の勢力を獲得した人類が主導し、他の星間種族も参画して結成された、地球時代の国際連合U.N.に似た機関——に議席を有するれっきとした独立国であるから、有事の際には連合安全保障理事会の決議と承認を得て結成される汎銀河連合平和維持軍（その実態は、太陽系連邦宇宙海軍外宇宙艦隊そのものと言つても良かったが）の支援を受ける事ができる。

そして、大抵の有事——といっても、彼らが侵略行為の被害者である場合に限られるが——であれば国軍がその戦力をすり減らしながら時間を稼いでいる間に強大そのものの戦力を誇る太陽系連邦軍の緊急展開部隊が駆け付けてくれる。それで十分な筈であつた。

だが、そうでありながらも彼らがこうも急いで軍事力の

統合を急いだ——いや、急がねばならないには理由があった。

彼らには、悠長に連合安保理の決議や太陽系連邦軍の到着を待つ事が出来ぬ程に切迫した、戦わねばならぬ敵がいたのだ。

人類とその「敵」が最初の接触を遂げたのは今から四年前。

高度な知能を持ち、蟻や蜂のように強固に統合された集団を形成し、自ら望んで苛烈な戦闘を仕掛け接触した対象の知能と技術を奪い取り（相手が有機体であるうが無機物であろうが構わず取り付き、取り込み、融合してしまうその行為を人類は「侵食」と呼んで恐怖した）、そして滅ぼす事のみを存在意義として生きる兵器の群れ——

かつて、それを生み出しそして最初の犠牲者となった隣れで愚かな星間種族の言語で「ヴァーミス」と呼ばれていた生きた兵器との間に、西方人類域の存続——いや、種としての人類とヴァーミスとの間に存在そのものを賭けた戦争が始まったのだった。

当初、戦争はヴァーミスの優位において進捗を続けていた。

死を全く恐れず——それどころか恐怖と言う感情自体を持ち合わせず、文字どおり一糸乱れぬ集団戦闘を行なう冷酷無比な生体兵器の前に、細かな作戦の齟齬や部隊運用のミスを突かれて人類側はあらゆる戦線で負け続けた。

更に質が悪い事に、恐怖を知らぬが故に退く事も仲間（そう呼んで良いのであれば）を庇う事もせずただひたすらに本能に刻み込まれた攻撃のみを続ける生きた兵器のあまりの無気味さの前に戦場神経症を患い、ともすれば発狂する兵士が続発した。

そして、チルダ軍——西方独立国家連合体が期待した汎銀河連合軍の介入は結局行われなかった。

ヴァーミスの行動原理の特殊性故に、迂闊な介入——スターゲイトを経由して銀河系を横断する大規模な艦隊派遣は避けるべきだという声が連合安保理でも、連邦宇宙軍統合参謀本部でも圧倒的多数を占めたからである。

そして、それは非情ではあっても間違った結論では無かった。

もしもヴァーミスにスターゲイトを奪取された場合、この恐るべき敵が銀河系全土に拡散し、如何に強大を誇る太陽系連邦宇宙艦隊といえどもその全てを駆逐するの不可能な程に戦線が拡大する可能性が高かったからだ。その為、連合安保理は連合軍の派遣どころか、西方にある全てのスターゲイトの引き上げ——引き上げの不可能な物は完全破壊を実施、この非情だが止むを得ぬ処置によってヴァーミスの拡散を食い止め、その存在を西方に封じ込めたのだ（そして、その措置は後に意外な形で正しかった事が証明された）。

戦いは、完全にチルダ軍の勇戦敢闘に委ねられる事になった。

それは、新興国の不完全な軍隊の寄せ集めに過ぎないチルダ軍には荷の重過ぎる戦いであった。

だがそれでも、開戦後暫くは後退一方だったチルダ側も開戦二年目の終わりに起ったアクルシオン星域海戦の大勝——無人の資源採掘惑星、アクルシオンVIIにダミーの自動工場プラントを設置し、それを餌としてヴァーミスの群を誘き出し、かつての植民星系独立戦争で乱用され数多の有人惑星を住人ごと吹き飛ばし、その威力故に

半ば禁忌の存在として事実上封印されていた大量破壊兵器、惑星破壊ミサイルの投入によって惑星ごと群れを殲滅した戦い——の後は、徐々にではあるが戦況は逆転し、そして今は逆に、ヴァーミスの群れを銀河系中心部、核恒星系方面へと追い立てつつあったのである。

そして、TF103の目的もまたそうしたヴァーミス掃討作戦の一部——この海域の周辺を制圧し、「巢」——疑似的に生物の繁殖メカニズムを模して構築されたヴァーミスの自動複製機械や、新たに生み出された生体戦闘機械が搭載する疑似知性体の学習フィールド等で構成された無気味な構造体群——を築いたヴァーミスの群体を殲滅する為に派遣されたのだった。



part.I

「TF103全艦、ワープアウト完了。現在速力、ワープ〇・九八より減速中」

「艦隊各艦の位置情報知らせ」

「了解。艦隊各艦は旗艦との相対座標確認後フォーマットに従い通知せよ」

ワープ航行を終えた宇宙艦が通常航行に戻る際に生じる僅かな時空の歪みによって生まれる軽い「宇宙酔い」の余韻に乗組員達が浸る暇もなく、TF103の旗艦である戦艦「ハンニバル」の統合戦闘指揮所に様々な命令が飛び交う。

人類域に所属する戦闘艦に共通したデザイン——かつての地球時代の水上戦闘艦を髣髴とさせる船体の上部に聳える艦橋構造とは異なり、強靱な装甲板とフォースフィールド、構造維持フィールドによって守られた主船体内部に組み込まれたCDCからでは、弱々しい光が瞬く辺境宇宙の姿を肉眼で眺める事はできない。

代わりに見えるのはお世辞にも広いとはいえないCDCの中央部に据えられた全周型ホロディスプレイに映し出される、コンピュータ処理された立体映像で、それからは星々の光は「無用の情報」としてオミットされてい

る。

にも拘らず、CDCの最も艦尾側の壁一面を占める司令部区画で、じっと佇立したままホロディスプレイを睨みつけるTF103司令官、アンリ・ダルラン少将の目には辺境宇宙の闇を照らす星々の姿が目映るよう感じられた。

(この海のどこかに——奴らはいる……)

事の始まりは、二ヶ月前の事だった。

新たに作戦任務に就く第116任務部隊と交替で艦艇の整備と乗組員の休養、そして消耗した装備と人員の補充の為後退中だった第74任務部隊がこの海域で消息を絶つたのだ。

無論、現在は戦時下でありTF74はヴァーミスとの不期遭遇戦により壊滅したと判断されたのだが、事はそれだけで終わらなかった。

TF74壊滅の三週間後、今度はTF116に兵站物資を届ける為に派遣された補給部隊が壊滅し、更にその一〇日後にはやはり近傍星系で配置転換と部隊再編の為後退中の陸戦部隊を乗せた輸送船団が全滅した。

奇妙な事だが、これまでヴァーミスは後退中の部隊や後方支援集団を襲う事は滅多に無かった。

人類とは戦争に対する思考が根本的に違う為か、それとも刷り込まれた本能によるものか、彼等は襲撃の容易な後方部隊よりも到底勝ち目のないような強力な戦闘部隊との交戦の方をより好む傾向があったのだ。

それは、苛烈な戦闘を生き抜く事による種内部での淘汰——より完成された自立兵器としての進化の促進——を存在意義の第一に据えられたヴァーミスの習性故のものであったが、そうであるが故に嘗ての人類同士の戦争とは違い支援部隊に対する脅威はこれまで然程感じざる必要がないのだった（それどころか、迂闊に有力な護衛艦隊を随伴させた場合、その護衛艦隊との戦闘を目的としたヴァーミスの襲撃を受ける可能性が高まってしまふ為却って後方部隊は非武装で行動するほうが安全ですらあったのだ）。

だが——
（奴らも追い詰められて「強い敵と渡り合つて種全体を鍛える」なんて悠長な事を言つてられなくなった、つて事か……）

この戦争において敗北が決定的になりつつある事を嫌でも自覚させられたヴァーミスも、さすがに生命体とし

ての生存本能を優先させざるを得なくなった——戦闘目的を種の進化促進の為の経験を得る事から種の保存の為にトリリ確保へと切り替えつつあったと見るべきだろう。

そうでなければ、取り立てて戦略的要衝とも言えず巢を作るほどの価値があるとも思えないこの海域に固執し、本来交戦の対象とは看做さぬ筈の相手にまで戦闘をふっかけてまでこの海域を守る理由がない。

だとすれば厄介な事だ——ダルランの思考がそこに達した時、不意にコンソールの一角に割込みのランプが灯り、彼の思考は現実へと引き戻された。

「どうした？」

「は、先行中の無人偵察機が何らかの人工物の一部を確認致しました……恐らくは消息を絶つた友軍の残骸かと」

それは、艦隊が最も無防備になるワーブ明け直後の瞬間を襲われるのを防ぐ為、先行してワーブアウトさせ艦隊前方を警戒させていたUAVからの通報だった。

尤も、UAVと言つてもヴァーミスによる乗つ取り——侵食を防ぐ為、ごくごく単純な機能のみしか持たされていないそれは予めプログラミングされたコースを飛翔してその過程で人工物に遭遇すれば指向性の通信波で定められた

シグナルを艦隊に送り、燃料が切れれば自爆するだけのものではない。

「解った。至急調査を行なう必要があるな」

そう言うと、ダルランは航海参謀にTF116との合流予定時間の確認を求め、それが今より九時間後である事を確認すると先任参謀を傍らに呼び寄せた。

「UAVの見つけた人工物だが、至急調査の必要がある。第51哨戒戦隊——『彼女』は出せるか？」

「は、我々も損耗の補充が不十分なまま作戦に投入されましたから……51も現状では定数を割っていきませんが行けるでしょう」

先任参謀がそう言うと、司令官は「宜しい」と首肯き、直ちにRG51に出動を命じたのだった。

『と、言う訳でだ。作戦開始前で済まんが一働き、頼む』
「了解です。じゃあちよつと行って来ますね」

戦艦「ハンニバル」の後部にある飛行科員待機所、艦上偵察機や哨戒多用途機の搭乗員の控室に割り当てられている区画にCDCからの連絡が入り、命令を受けた小

柄な少女が飲みかけの紙コップの中身を慌ただしく飲み干しながらテーブルから立ち上がった。

「出動？」

「うん、無人機が行方不明の艦隊の残骸っぽいのを発見したから確認に」

「そう、いつてらっしゃい」

同僚の女性科員達から掛けられた声にその都度返事を返しながら待機所の一角を占める女性専用エリア（と、いつでも床に張ったビニールテープの境界線と天井から吊るしたカーテンの仕切りが有るだけに過ぎないが）を出た少女は、女の園から締め出しを食らった男性科員達があげる歓声とそれに呼応するかのように女性専用エリアからあがるブーイング——これは別に彼女に限らず飛行科の女性科員が出動を命じられた時の恒例行事のようなものだった——を背に微笑を浮かべながら隣接する装具室に足を運んだ。

そして、やはり内部でこちらは待機所よりも厳密に、ポルト増設された衝立で仕切られた女性エリアの最も奥にある自分専用割り当てられた装具ロッカーを開くと、まず着込んでいたネイビーブルーのフライントジャケットのフアスナーを下ろした。

フライトジャケットを脱いでハンガーに吊るした彼女はロッカーの中から必要な装具を取り出し、まず高機動時のGや衝撃から両肩と肺、鎖骨と肩甲骨を保護するサポーターを身に着けると次に頸部の保護と生体情報のモニタリング装置、緊急時の生命維持装置を兼ねたライフサポートユニットを装着する。

続いて、指先から上腕までを覆うグローブの二の腕に船外活動用の各種機材を接続するリングマウントを嵌め、手首に海兵隊でも使用されている白兵戦用多機能エミッタを装着し、伸縮繊維で作られ、太股から足首全体までを覆う艦内靴を脱いでフォースフィールドエミッタと慣性制動器を内蔵したブーツを履く。

最後に、通信装置と網膜投影ディスプレイが組込まれたヘッドセットを装着し、後頭部のマウントにマルチセンシングユニットの多機能アンテナパネルを嵌め込むと準備完了となるのだが、それにしても装具を整えた少女の出で立ちは奇妙としか言いようがなかった。

確かに、フォースフィールドによる全周保護技術の発達したこの時代、原始的な密閉型宇宙服——それは脱着にも手間が掛かり、不快で、しかもコストも馬鹿高く嵩

張るシロモノだった——は完全に姿を消し、少女が身に付けたような簡便な装具のみの着の身着のままに近い状態で宇宙空間に出る事が可能になっている。

に、しても通常の飛行科員と少女の出で立ちはあまりにも懸け離れ過ぎ——確かに、飛行科の飛行士、特に女性搭乗員が飛行服の下に身に付けるのも高G機動時のずり落ちの心配をしなくてもよく、また体にフィットするため動きやすい代わりに体のラインはかなくなりつきりと出てしまうレオタード風のインナーウェアだったが、少女の着ているそれはどう見ても初等教育過程の女兒が学校で着るいわゆるスクール水着（ただし、学校で使うにはあり得ない白色）にしか見えない上、本来ならその上に着る筈の上下繋ぎの飛行服も着ていない。それはとても外洋戦闘艦の飛行科員とは思えない姿だった。

そして、それを言うのであれば少女の外見も軍人にしてはあまりにも幼く、どう見ても一〇代前半にしかみえないのだが、それを奇異と思うものは（少なくとも「ハンニバル」乗組員と軍内部には）存在しない。

いや、それどころか素肌も露な白いスクール水着様のウェア——陸軍や海兵隊でも採用されている、かなりの対刃・

対弾・耐熱特性と糸にマイクロマシンを織り込むことで然程の出力ではないが各種装具へのエネルギー供給も可能な特殊素材で作られ見た目とは裏腹の価格と性能を誇るそれは、正式にはスベックスーツと呼ばれている——の上からフライトジャケットを羽織り、下半身はすらりとした細い足を包む白い艦内靴のみ、多くの女性乗組員がそうするようにIDタグや船外活動時の位置情報発信機、被弾や事故などで艦内の気密が瞬間的に抜けた時に自動的に作動する短時間だけ使用可能な緊急用簡易フォースフィールドエミッタ等を組込んだサポーターリングを艦内靴のずり落ち防止の留め具替わりに嵌めつけしにした太股と少しぶかぶか気味のフライトジャケットの裾の間にちらりと見える染み一つない素肌と見えそうで見えない裾の内側のお陰で彼女が待機室の女性専用エリアと装具室の間を移動する時にあがる歓声とブーイングは大半の女性科員のそれを凌ぐのだから世話はない、としか言いようがなかった。

とまれ、装具の確認を終えフォースフィールドエミッタのスイッチを入れて全身をすっぽりとおおうフィールドの発生に支障がない事を確認した彼女は、装具室から

格納庫へと続くドアを開けた。

「よ、作戦海域到着前から仕事とは大変だな」

「あはは……」

CDからRG51の出勤を命ぜられていた格納庫では、少女の到着を待ち構えていた先任の整備長が彼女の姿を認めるなり大声で怒鳴った。

「機動ユニットの方は準備完了、随伴はどうするよ？ 一応全部出せるようにはしてあるがな」

そう言つて怒鳴る整備長の指差す先には、彼女専用で製造された——といっても、一般的な船外作業ユニットをベースに機動性を引き上げ、戦闘任務に必要な火器管制装置や追加のフォースフィールドエミッタ、機動歩兵装備用のアタッチメントなどを増設したものが——と、彼女が任務の際に伴う小型無人随伴艦——チルダ宇宙艦隊の主力駆逐艦である「種族」級の船体をUAVサイズにまで小型化して突起物などを極力廃しよりスマートなフォルムにしたような超小型艦——が整備を終えて並べられていた。

ただし、随伴艦を並べてあるスポット一六カ所のうち、六カ所は主の姿なく空白のまま——本来ならば二週間の整備と休養、消耗物資と人員の補充の為の本国帰還を行なう

予定だったTF103を急遽戦場に呼び戻した為、前回の作戦期間に失ったRG51の無人艦もまた補充を受け損ねたのだ。

前回の作戦期間に失った随伴艦は九隻。うち三隻は部品状態でハンニバルの格納庫にストックされていた予備を組み立てたり、帰還はしたものの損害が酷く再利用不能と判断されたスクラップから使えるパーツを取り出して組み合わせ再生して補充していたが、どうしても六隻分は手配が付かないままの再出撃となってしまうのだった。

その随伴艦群の姿を眺めながら一瞬「うーん」と考えた少女だったが、すぐに考えを纏めると整備長に向き直った。

「今回は単純な偵察任務ですから、ブラウヤー B 小隊だけ連れて行きます」

「了解。出動は51B。アルファ Aとチャーリー Cは即応待機な」

少女の判断を命令という形で部下の整備員に怒鳴つた整備長は、少女が女性整備員の手を借りて機動ユニットの装着を終えるのを確認すると格納庫の真上にある飛行管制センターパイロットにRG51の出動準備が完了した事を告げ

た。

「第51哨戒戦隊、RP-TH060エグゼリカおよび『アールスティア』級無人随伴艦三隻、漂流物の調査の為発艦します」

『“ハンニバル”飛行管制了解。気をつけてな、嬢ちゃん』
「はい、じゃ行って来ます」

規定に従った交信の最後だけ、調子が崩れるような軽いやり取りを交わした後、エグゼリカと名乗った少女は二重のシャッターによつて仕切られた減圧区画の向こうにある露天の離着艦甲板フライトデッキに立ち、一瞬漆黒の闇に散らばる星明かりに一瞥いちめつをくれた後、その吸い込まれそうな底なしの深さを湛える星の海に身を委ねるように、静かに甲板を蹴って飛び上がった。

そのまま、ゆつくりと艦と平行に飛び、航海艦橋の脇を掠める時だけほんの一瞬スピードを緩めて目視窓の方を振り向き、笑顔と共に敬礼を捧げる。

その敬礼に、微苦笑を浮かべながらわざとらしい杓子定規な敬礼を返す副長と表情は厳格そのものだがどこか砕けた敬礼を返す艦長の姿を目に止めたエグゼリカは、くすつと小さな笑みを浮かべると挙げていた手を下ろし、今度は

真つ直ぐに前方の闇だけを見つめながら機動ユニットのエンジンに点火して急速に「ハンニバル」を離れて行った。

「ハンニバル」を発艦して三〇分。

単調な飛行が続く中、時折細かく姿勢を変え視線を四方八方に巡らせて全周に気を配りつつ、母艦の管制センターに陣取る同僚の女性士官がかけてくる完璧に規律違反のお喋りにも付き合ひながら、エグゼリカは三隻の随伴艦を引き連れて闇の中を一人、飛び続けた。

と――

まもなく、ほんの一瞬だがちらりと視界の片隅に明らかに自然のものとは異なる光の反射を認め、「ごめん」と雑談の相手に一声かけると、表情を引き締める。

エグゼリカの表情と声が真剣なものに変わった事で雑談の時間が終わった事を察した管制官も表情を改め、口調と姿勢を完璧に任務の為のものに改めた事を確認したエグゼリカは、慣性飛行を止め減速を行なう為に姿勢を改め、機動ユニットのスラスターの制御に意識を集中し

た。

パツ、パツと機動ユニット本体から伸びる四本の多機能アームの先端に取付られた姿勢制御用スラスターを小刻みに噴射させ、緩やかに速度を殺しながら同時に間違ひなく残骸の周囲に広範囲に飛散しているであろう夥しい浮遊破片との衝突を考慮してフォースフィールドを強化する。

更に念には念を入れて、三隻の随伴艦のうち、二〇ミリX線パルスレーザー機銃と七六ミリ電子熱砲を搭載した防空艦を前方展開させてフォースフィールドでは防げそうにもないようなデブリを即座に破壊出来るよう準備を整えた上で、「これより最終接近を開始します」と通信を送ったエグゼリカは表情を固く強ばらせながら、殆ど歩くような――と言つても端からみればそう見えるだけで実際にはなお時速三〇〇キロメートル近い速度を維持しているのだが――速度で調査対象の漂流物の漂う海域へと足を踏み入れた。

「――！」

早速、浮遊する細かなデブリがフォースフィールドに触れ、エグゼリカの周囲が盛大に青白い閃光の瞬きに満たされる。

「いやな……予感がする」

予め予期していたとはいえ、散乱するデブリの多さに尋常ならざるものを感じ恐らくこの先で待っているであろうものから目を背けたいと思う気持ちをぐっと押し殺しながら、多機能アームに取り付けられたカメラの映像を「ハンニバル」に送信しつつエグゼリカは浮遊する残骸本体へとゆつくりと近づいていった。

「それ」とエグゼリカが接触したのはそれから一分後の事だった。

それを一目見た瞬間、エグゼリカは「うっ……」と小さく呻いたきり、暫し声を出す事が出来なくなってしまう。

「これは……酷い……」

ようやくの事で喉の奥から絞り出すようにそれだけを呟くと、後は黙ったまま、かつてはチルダ宇宙艦隊の大巡洋艦であった物体の惨状を淡々とハンニバルへと送信し続けた。ただ黙々と仕事を熟し感情を押し殺す事が唯一感情の爆発を抑え込める手段であるかのように。

「それ」は、TF74の旗艦だった装甲巡洋艦「チェーザレ・ボルジア」の変わり果てた姿であった。

無論の事、無残に破壊され尽くした「ボルジア」の艦内に生者の姿は——いや、死者の姿すらない。ヴァーミスに侵食され、消化されてしまったかあるいは死体となって漂ううちに慣性速度とベクトルの差から艦の残骸から放り出されどこか別の空間に流されたか、何れにせよ装甲巡洋艦「チェーザレ・ボルジア」“であったもの”は今では虚しく宇宙を漂う艦の亡骸以外の何者でもなかったのだ。

更に三〇分、艦内を隅無く搜索したがやはり生者も死者も発見は出来なかった。

『もういいぞ……恐らく無駄だとは思うが他の艦に移ってくれ』

エグゼリカが艦内を搜索している間、艦外で哨戒行動を行ないつつ待機する随伴艦を中継して届けられた映像を息を押し殺して見つめていたTF103参謀長、セルゲイ・ドローズデン大佐の怒りと苛立ち、そして悲しみを押し殺した声が通信機越しにエグゼリカの耳元で響いた。

「了解」

それに答えるエグゼリカの声もやはり低く、暗い。落胆を抱いたままもときた道を引き返し、舷側甲板と外板をざつくりと引き裂いて舷側に穿たれた巨大な亀裂から艦外に

「ボルジア」の周囲に漂う残骸は六つ。そのうちのひとつ、「ボルジア」同様に完膚なきまでに破壊され殆ど元の姿を思い起こす事は不可能に近いが、それでもなんとか艦首に書かれた艦番号から「トライヴアル」級駆逐艦「マウリ」と判明した残骸を調査し、更に同級の「コサック」で三度目の失望を味わい、四隻目に向かおうとしたところで、再びドローズデンから通信が入った。

『そろそろ時間切れになる……それにこれ以上の捜索は恐らく無駄だろう。ご苦労だった、帰艦してくれ』

「ですが……いえ、了解しました。RG51、TF74所属艦残骸の調査を終了、帰還します」

なんとか、せめて一人でも……たとえ亡骸であっても連れ帰り、吊ってやりたい。

それはエグゼリカだけでなくドローズデンもダルランも——いや、「ハンニバル」で映像をモニターしていた誰もが思った事だろう。

だが、無情にも時計の針は休む事なく時を刻み続けており、直ちにRG51を回収してTF116との合流点に向かわねばならない時間になりつつあったのだ。

母艦からの指示に、後髪引かれる思いを抱きながら何度も主を失った残骸の姿を眺めていたエグゼリカだったが、それでも意を決して軽く被りを振ると、待機中の随伴艦を呼び戻し、艦隊に戻るコースへ向け再び飛翔を開始しようとした。

前方展開しつつあった防空ミサイル艦のセンサーが警報を発したのはその瞬間であった。